

初代センター長の思い出

理工学部都市工学科

荒牧 軍治

センター長に就任

「どうせ汎用コンピュータを入れることになるんでしょう？」と皮肉めかして質問したとき、福井先生が「今度は汎用コンピュータではない新しいシステムを導入します」と意気込んでいたのは確か大学会館の食堂だったと記憶しています。DEC750 やアポロ Domain といったスーパーミニコンと呼ばれるコンピュータに慣れ親しんでいた私には「汎用コンピュータ」の使用手続きの煩雑さはどうにも我慢のならないものでしたから、大いに期待は膨らみましたね。センターが汎用コンピュータを退け、ミニコンピュータを中心としたシステムを採用したのは多分「ネットワーク」対応の多様性と容易さにあったとは思いますが、コンピュータエンドユーザの私にはミニコンの使いやすさの方が魅力でした。ところで「情報処理センター長を引き受けてくれませんか」と口説かれたのは、どこだったかは今では定かではありません。

センター長に就任して挨拶回りで事務局長のところを尋ねたとき、「先生も大変なところを御引き受けになって」と意味深な言葉が漏れたのがちょっと引っかかりました。後に、情報処理センターのコンピュータ及びネットワークシステムがどのように決まっていたかの顛末記を聞くに及んで事務局長の言葉の意味を何となく理解することが出来ました。これまで使用してきた汎用コンピュータの継続使用を当然だとする派と、新しいコンピュータシステムの導入を図っているグループの駆け引きは、最後の段階で文部省までも巻き込んでしまったらしいのです。ミニコン支持派の私としては「何、良い方に決まったのだから良いでしょう」程度の気持ちでしたが、事務局は相当に緊張していたようでしたよ。

助手ポストの獲得

計算機センターと情報処理センターとの最も大きな違いは「ネットワーク」の有無でしょう。各建物までは光ケーブルを設置し、建物内にはイーサネットの黄色いケーブルを張り巡らす計画が出来てはいたのですが、工事費はセンター設置予算に組み込まれていません。ネットワークの組み込まれていないシステムは、情報処理センターではなく計算機センターに過ぎません。学長と事務局の好意で年間3000万円程度しかなかった「営繕費」の中から2000万円くらいを2年間使わせていただくことが出来たことは望外の幸せでしたが、そのためにどこかの営繕工事が遅れたはずですから、ちょっとだけ申し訳ない気がしたものでした。

ネットワークが主要な仕事になってくるとセンターの人手不足は深刻な状況になってきました。イーサネットと接続機器類を設置管理している間にもネットワーク技術は進歩し

て次々に新しいハードとソフトを開発し続けます。センターの維持管理を行いつつ新しい技術ニーズに対応するためには、どうしても現有の人数では不足すると判断し、助手ポストを獲得する運動を開始しました。当時の学長は理工学部出身の楠田先生でしたので、これからのネットワークの重要性を力説し、人材不足の現状を開陳したら、結構すんなりと理解していただきました。空き定員を流用しての助手ポストに物理修士課程を修了した渡辺健次君を採用してネットワークにも対応する布陣が整ったと言って良いでしょう。

「先生、九州地区のネットワーク委員会に出席してください」との渡辺君からの要請で、九大で開催された委員会に出席したときほど惨めな思いをしたことはなかったな。最初の2時間くらいはネットワークシステムに関する技術的な検討が続いたのですが、そこで語られている言葉の90%以上が意味不明なのです。確かに日本語で会議は続いているのですが、全く理解できない。頭の上を言葉が行き来するのを、心を空(くう)にして音だけを聞いていたような気がします。最後になって負担金の問題が議論されてやっと私の出番が回ってきました。情報工学の権威、牛島先生が「荒牧先生、金のことになるとこの人達は無口になるのですよ」とニヤリとされたのを今でも覚えています。私にも役に立つ議題が用意されていたのです。

情報リテラシー教育についての議論

センター長には年2回程度の出張が義務づけられていました。一つは毎年文部省が召集する情報処理センター長会議で、もう一つは情報処理教育シンポジウムへの参加です。センター長会議の方はなんということはない会議ですが、情報処理教育シンポの方は結構面白い会議でした。「情報処理教育とはなんぞや」を巡って2派が対立する構図です。一つの派は、「コンピュータの原理、問題の分析とアルゴリズム、プログラミングこそが情報処理だ」と主張し、もう一つの派は「コンピュータへの入り口であるキータイピングの段階で脱落する学生が多い。タイピングから初めてワープロ、表計算が使えるれば十分である」と主張していました。前者はどちらかということ国立帝大系、後者は私立文化系と言った構図だったようです。私たちは両者の言い分に耳を傾けて「佐賀大学ではどうするんだろう」と考えていましたね。両者の言い分が「情報リテラシー」と言う言葉の中に収斂していくのに3年くらいの時間がかかったと思います。その中で、両方の論陣を張っている先生方の殆どが「物理」出身だったのが興味深かったですね。新しい学問、教育、技術が生まれるとき「物理」出身者がいち早く参画してくる風景は面白いものです。「ポスドクの人材があふれていた」と言うのが真相でしょうが、物理学という学問自体の中に新しい事象に対応する柔軟性があるのだというのも理由の一つかもしれません。

佐賀大学の教養教育を改編するプロジェクトに参加する機会があったので、「情報リテラシー教育」を全学必修化するよう主張し続けました。「全学基礎教育科目」と言うカテゴリーの中に、健康・体育、語学と並んで「情報処理」を位置づけることが出来たのは、「ちょっとだけ時代を先取りしていたかな」と自慢の種ですね。シンポジウムで熱心に議論され

ていたセンター関係者に謝意を表しておきましょう。最初の段階で必修化に参加されていなかった経済学部も数年前から必修化に踏み切られたとのことですので、やっと全学必修化が実現したことになります。

ところが、我々が大学で実施している「情報リテラシー教育」は中学、高等学校で必修化される状況にあります。そうなると数年後には今のままの「情報処理教育」は不要になります。「情報処理教育」の中身を検討し、新しい講義・演習内容を構築するか、共通基礎教育科目から除くかの選択を迫られる時期が来ます。もう一度、あの熱い激論を再開する必要があるようです。若手教官諸氏の奮闘を期待しています。これだけ情報処理の範囲が広がってくると、もう物理出身だけの教官の参加だけでは間に合いませんよ。